

ほのぼの

第53号

令和元年

11月

発行

信行寺門信徒会

神戸市須磨区戎町1-2-3

TEL.078-732-5209



「ただいま」

住職

「老い」が「足」に現れると、階段の昇り降りがだんだん厳しくなります。転びやすくなります。駅の階段で転んだ人の体験です。なかなか起き上がるのができなかつた。何人もの人が通り過ぎていった。しかし、倒れている私への「大丈夫ですか」の一声もなく通り過ぎていったそうです。寂しい現実です。

社会の機能がうまく動いていないと、孤独を感じる人が増えてきます。個人を大切する個人主義は良いことです。しかし、受け止め方によっては、他人に対しては「われ関せず」の態度になりがちです。また、自分の殻に閉じこもってしまふ。「私のかつてヨ、いらんこと言わん」といって、ほっといて」と、ひとの意見を受け入れられないようになります。ついには「わたしは誰の世話にもなっていない。一人で生きている」と思ったり、

「私のことを誰も心配してくれない」と、引きこもったりします。

七十年ほど前には戦争で親を失った戦災孤児の方がいました。今は独居老人が増えています。幼くして親のないのを「孤」といい、老いて子なきを「独」というそうです。どちらも「ひとりぼっち」で寂しい状態を表す言葉です。助けてくれる人も相談する相手もない生活です。このような寂しさを「うたたねの　しかる者なき　さむさかな」と良寛さんはうたいます。動物は生きるために群れを組んでいます。群れの中では他に対する「やさしさと思いやりの心」が欠かせません。人間も動物の一種に違いありません。しかし、人間と呼ばれる社会に生きています。ひとそれぞれに理由はあるでしょうが、人間であることを忘れないようにしたいものです。

家庭は小さな社会です。子供がわが家に帰ると「ただいま」という。出迎える親は「お帰り」と微笑みながら応える。なごやかな日本の原風景です。これが家庭です。家族です。そうでなければひとつ屋根の下に

同居している同居人でしかありません。あるいは戸籍の上だけの家族です。「家はあるけど家庭がない」と表現した人もいます。

「行って来ます」に、「気を付けてね、寄り道せずにはようお帰り」と愛情に満ちた声で送り出してもらい、「ただいま」でわが家に戻る。戻ることがなければ糸のきれた凧です。どこに飛んでいくかわかりません。自分も不安ですが、それよりも親が一番心配しています。それが家庭であり、離れて住んでいても家族です。

旅行の好きなAさん、年に数回旅行します。「あそこはよかった、楽しかった」と、旅行先のことを楽しそうに話してくれます。旅先が楽しいのは帰る我が家があるからです。帰る所がなければ楽しくありません。

私たちの一生は旅に譬えられます。百年かけての旅です。旅が終わる日が必ずきます。どこに帰るべきでしょうか。私は阿弥陀さまの大悲の世界お浄土に帰ります。今日一日の旅も阿弥陀如来の大悲の心・南無阿弥陀仏に帰ります。「ただいま・南無阿弥陀仏」です。

辻英子さんの思い出

坊守

辻英子さんが往生されました。思い返せば四十年ほど前、住職が信行寺婦人会を新たに結成するにあたり、会長を引き受けてくださいました。今の信行寺の活動の基盤を作り、その後の発展に寄与してくださった第一人者でした。

誠実で明朗、誰にでも優しく親切に接し、リーダーとして皆様に尊敬される人でした。震災前の婦人会の新年会・総会には役員方とちらしずしを作って振舞われたり、辻さんご自身も習得されていた仕舞をひかえめながらも披露された美しい姿を思い出します。

お寺の行事活動も次々に増え、会員も増加し、会長として大変多忙だったことと思いますが、辻会長を中心に皆様が仲良く楽しく参加され、「お寺にくるのが楽しみです。」と多くの人が言われておりました。毎月の法座の他、研修



旅行、本山念仏奉仕団、大谷本廟参拝と数々の思い出がつきません。

しかし、あろうことかご主人様が六十才の若さで往生され、その後最愛の一人息子さんにも先立たれるという境遇に見舞われました。その時言われていました。

「お寺でこうしてご聴聞させて頂いていたおかげで今はすくわれています。」

晩年、いろいろな病気もあり、歩行困難となりました。

しかし、ご自宅で一人き

り、気丈にも九十三才で往生されるまでしっかりと生き抜かれ、お念仏に導かれた見事な人生でした。

辻さん、本当にお世話に

なりました。楽しかったです。残った私たちががんばります。ありがとうございました。



第25回・兵庫教区・神戸西組・信行寺・念仏奉仕団・平成20年11月8日

「師主知識の恩徳・・」天親菩薩

副住職



前回に引き続き今回はインドの天親菩薩について紹介させていただきます。天親菩薩（ヴァスバンドウ）は新訳では世親菩薩といわれています。西暦およそ四百年に北インドのガンダーラ地方に生まれました。現在のパキスタン領、ペシヤワールです。龍樹菩薩と同じく、バラモンの家に生を受け、三人息子の次男として生まれました。天親は他の兄弟と同じく小乗仏教（説一切有部）において出家します。聡明で記憶力にも優れ、後に小乗部派仏教の思想をまとめた「俱舍論」など多くの著書をあらわしました。「俱舍論」はインド、中国、日本で広く読まれて今日に至っています。そのころ、兄のアサンガ（無着）は大乘仏教に転向していたので、弟の天親が大乘仏教に邪見をいだいているのを危惧していました。

兄の無着は何とかして弟が大乘仏教の真意を理解することができるよう努め、最終的に天親は自分が抱

いていた大乘仏教に対する邪見に気づくのです。大乘誹謗の罪の意識から自分の舌を切りとうとする天親を兄は制止し、その舌をつかってこれからは大乘仏教を広めていくように諭します。そして、無着から大乘仏教の教えを学んだ天親は兄の無着と共に「唯識」という大乘仏教思想を説きました。この思想は龍樹菩薩の中観派と並んで大乘仏教の二大潮流として後世に大きな影響を与えました。日本には奈良仏教の法相宗として伝わっています。ちなみに、法相宗の大本山「興福寺」には国宝の運慶作（鎌倉時代）の木造無着・世親立像があります。

天親菩薩の著作は二十九部が現存しますが、その中に阿弥陀仏の浄土信仰を著した「浄土論」があります。親鸞聖人が正信偈のなかで、「天親菩薩造論説」と言われている論がその「浄土論」です。天親菩薩は浄土論の冒頭に「世尊（釈尊のこと）、我一心に尽十方無碍光如来に帰命して、安樂国に生まれんと願う」と自らの信心を明かし、阿弥陀という仏さまを尽十方無碍光如来という言葉で初めて表されました。尽十方とは大宇宙のあらゆる場所に満ち満ちていること。そして

無碍光とは、どんなものにもさまたげられず至り届く光。

その摂取不捨のはたらきによって、我々の煩惱をも障りとせず、一切の衆生を救いとる智慧の仏さまなのだということとが知らされます。正信偈には「帰命無碍光如来 依修多羅顕真実」と続きます。この修多羅というのはスートラ（釈尊の直説）のことで、阿弥陀仏の本願が説かれている無量寿經のことをさします。この仏説無量寿經に説かれている真実清浄の世界は智慧の功德を円満に具えています。が、その功德が常に生きとし生けるものにはたらきかけ、浄土に往生させずにはおかまいという大悲となつてはたらくし続けています。その大悲の心が本願力として帰命尽十方無碍光如来という名号に顕されたのです。それは南無阿弥陀仏のお念仏と同じことです。お念仏という本願の回向によつてすべての衆生を浄土に往生させて仏とするために、天親菩薩も一心に無碍光如来に帰命し、同じく衆生も一心に帰命せよと勧められているのが、「広由本願力廻向 為度群生彰一心」という正信偈の御文です。天親菩薩が浄土論で説かれた一心こそ、まことの信心であるとして、親鸞聖人は尊号真像銘文に「一心というのは、教主世尊のみ教えを一筋に信じて疑わないことです。」と述べられています。

夏期法座

八月十八日、第三十七回信行寺夏期特別法座が今年も行われました。今回の法題は「法に遇う」で、住職の法話、午前午後に分けて行われました。また、今回はテーマについてグループで話し合い、発表する形式も行いました。テーマは「愛犬は浄土に生まれることができるのか」です。これは、檀家さんから聞かれた素朴な疑問です。グループの発表の結果は、出来る・出来ないの答えがちょうど半々でした。その後、このテーマについての法話が副住職と住職からありました。みなさんもこのような疑問はありますか？ぜひ質問をお寄せください。（方法は8ページをご覧ください。）

また、木下さんの指導のもと「おかげさま」「琵琶湖周航の歌」「一人じゃなかもん」などの歌を皆さんで歌い、楽しい時間を過ごしました。

来年の夏期法座もたくさんのご参加をお待ちしております。





法語カレンダー

今回は、本願寺出版社の法語カレンダー、十一月の言葉の説明をします

眞の知識に
あうことは
かたきがなか
になおかつ

まことの仏法の先生にお会
いすることは、難しいことの
中の難しいことです。

「眞の知識」とは、善知識のことです。善知識にあることは、難中の難（かたきがなかになおかつ）であるということです。

仏法での「知識」とは一般的にいう法律や仕事などの「知識」とは異なり、仏法を説き聞かせてくださる先生のことを「知識」といいます。私たちが、いくら

仏法を聞きたいと思っても、聞かせてくださる方がなければなりません。

親鸞さまは「あいがたい」ことを示すのに「叵（かたい）」という不可の意を表す文字を用いていらつしやいます。単に遇うことが難しいという意味ではないのです。「遇うことは不可能だ」、私の思いや努力で、遇うことはできないことだったとお示しになっています。本来は決して遇うことができないはずのみ教えに、今遇うことができた。それは私の努力によるものではない。阿弥陀さまのお手回しによつてはじめて遇うことができた。「遇うことはかたい」というこのおことばの奥には、阿弥陀さまのおかげで、遇うことができたという大きなよろこびがありました。

親鸞さまは九歳の春、出家されお坊さまになられました。それから二十年、比叡山で勉強修行をされましたが、さとりを開くことができず、法然さまのもとでお説教を聴聞されたと伝わっています。眞実の仏法を教える法然上人に巡り会えた親鸞さまは、なんと幸せ者であつたのかの喜びのお言葉でもあるのです。

日頃の疑問を考えよう

お寺ではどのようなお勤めをしているのですか？

前月号（ほのぼの五十二号）で紹介した正信偈をお勤めすることがもっとも多いです。正信偈にはいろいろな節がありますが、普段は草譜という節です。行譜という節は報恩講などの特別な場合のみにお勤めします。

お勤めが終わった後に、少しわかりやすい言葉で拝読している文章は何ですか？

「御文章」ですね。御文章は、本願寺第八代宗主蓮如上人がご門徒の方にみ教えの要をわかりやすいお手紙のかたちで記されたものです。住職は、「末代無智の章」を拝読することが多いです。法事などでは、「白骨の章」を拝読します。



毎月の仏教講座・護法会法座・定例聞法の集いでは、どのようなことをしているのですか？

内容はそれぞれ違いますが、御和讃や研修読本をもとに、住職や副住職、講師の先生をお招きして法話を行います。

す。また、礼讃文や領解文、浄土真宗の生活信条を唱和したり、仏教讃歌をうたったりもします。

礼讃文や領解文とは何でしょうか？

礼讃文は、三帰依文ともいい、大切な文として、勤行聖典の一ページ目に載っています。「人身受け難し、今すでに受く・・・」と始まり、「仏法僧の三宝」に帰依しますという内容を表しています。

領解文は、真宗教義を会得したままを口に出して陳述するように蓮如上人が作られたものとされています。内容は簡潔で、一般の人にも理解されるように平易に記されたものですが、当時の異安心や秘事法門に対して、浄土真宗の御安心をあらわしたものです。

信行寺本堂に、巻物が置かれていますが、あれはお経なのですか？

あれは、浄土三部経（仏説無量寿経・仏説観無量寿経・仏説阿弥陀経）です。親鸞さまはその中でも「仏説無量寿経（大無量寿経）」を真実の教と仰がれました。





信行寺行事予定とご案内



◇報恩講法要

十二月二十三日（土）法話 若林 真人 先生

十二月二十四日（日）法話 住職

二日間とも午後二時より四時までです。

ご都合に合わせて、一日でもお参り下さい。

二十三日にはお斎の接待があります。

◇新春初法座

令和二年 一月五日（日） 午後一時より

お正月をお寺で楽しくお迎えしましょう。

お勤め、法話の後、皆さんと楽しく語らいながら、御馳走（お世話の方々手作り料理を持ち寄ってくださいます）をいただきます。

「日頃の疑問を考えよう」のコーナーで取り上げてもらいたい質問などありませんか？ お寺に用紙も用意しておりますが、メールでの質問もお待ちしています。 shujiyonedahotmail.com

編集委員より

中村哲医師は、一九八四年よりパキスタン・アフガン（戦争が絶えない地域）の難民や貧困層の診療活動を開始します。高い幼児の死亡率などはペシヤワール並びにカイバル峠を越えたアフガン地域の井戸の渇水と水質悪化に原因があることを知りました。そして、現状を確かめた中村医師は医療活動が続けながらも、アフガンの大洪水と大旱魃で荒廃した農地の回復の為に水利事業（飲料水・灌漑用の新しい井戸掘り）を手掛けるに至ります。「飢えと渴きは薬では治せない」と農業用水路の建設も開始しました。二〇一八年十二月時点、灌漑域で四十万人の帰農者が確認されるほどの成果を上げています。

私は、奈良時代の土木・治水などの社会事業で貢献された行基を思い浮かべました。用水が時代を超えて恵みと平和を運んでいきます。

